

### 本草学とは

「本草」とは薬用となる動植物（特に植物）の総称であり、「本草学」とは薬になる天然の動植物の研究についての学問である。

中国では本草学専攻の博士を中心として本草学が盛んであり、書物の形態まで発達したのが漢代（1世紀）以後といわれている。紀元17世紀の徳川時代には、中国の植物の博物書とされる『神農本草経』がまとめられたといわれているが、原本は残っていない。

徳川幕府がこれを復元し、『神農本草経』の内の365種を『名医別録』の中の365種に730種類の植物をまとめ、草を別として7巻本とし、『神農本草経集注』とした。これに何れも注釈が加えられ、様々な本草書が編纂された。また1774年に、明治時代の代表的な本草書といえる寺崎の『本草綱目』が完成した。

この『本草綱目』が江戸時代に流布されて以降、多くの学者たちがこの『本草綱目』を解説・研究し、日本に存在する植物・動物などの研究に展開していった。



### 『本草図譜』七十二卷

蓮花  
『本草図譜』には、蓮花（ハス）が4種にわたって載っており、ハスの花図は花だけを7種、品種図では60種程度にのぼる。

それらの品種名は『白川図説』を調べた。『本草図譜』本文に記述されている『白川図説』は、別名『浮世図説』で、江戸時代に存在した白川松平定信（1778～1829）の別荘にある花園である。定信は幕府の意中であり、ハスが好きな定信から品を集め、花が咲くと絵師に写生させた。

その定信の種家で若年寄となった、堀田正敦（1755～1832）は、定信と大変親しくしていた。正敦は定信の援助者であったため、定信は正敦を通じて定信と親しくしたためである。『本草図譜』で4冊もハスの図譜としたのは、定信の定信と正敦との関係が考えられる。

